

張德順著／姜漢永
油谷幸利共訳

韓国古典文学入門

国書刊行会

韓国古典文学入門

昭和57年4月30日 印刷

昭和57年5月15日 発行

定価 7,500円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著者 張 徳 順
訳者 姜 漢 永利
油 谷 幸 利
発行者 佐藤今朝夫

制作・割田剛雄

〒170 東京都豊島区巢鴨3-5-18

発行所 株式会社 国書刊行会

電話 (917)8287(代表) 振替・東京5-65209

落丁本・乱丁本はお取替いたします。 印刷・セイユウ写真印刷 製本・大口製本印刷

日本語版への序文

韓国固有の文字である訓民正音（ハングル）が十五世紀に創制されたからと言って、韓国文学の歴史が、五百年にしかならないと考えるのは早計である。早くから漢字文学が隆盛を極め、漢文学の遺産は、ハングル文学よりも質量ともに遙かに優勢であった。新羅・百濟・高句麗、そして高麗時代は、漢字文学が韓国文学の主潮をなしていたが、新羅時代には、所謂「郷歌」という特異な文学様式が生成・発達していた。表記された文字は漢字であるが、読む方法は「吏読式」といって、日本における万葉仮名と同じく、音と訓を混用していたので、漢詩とは区別される。

朝鮮王朝は、ハングル文学と漢字文学とが並存した時代であったが、漢文学は依然として活発であった。しかし、表音文学であるハングルは、文学活動において新たな境地を開拓した。時調・歌辭などの抒情作品はもちろんのこと、叙事作品の創作の上でも適切な文字であった。このハングルこそは、韓国人の思想・感情を盛り込むのに最もふさわしい器となり、十八世紀以降になると、漢字の使用は次第にすたれて行き、ハングル専用となって今日に至っている。

韓国の古典文学を文字を中心に論ずる時には、必ず漢字・吏読・ハングルによる文学を同時に扱わなければならない。そして、文字以前の文学として、口碑文学を文学史から除外することはできない。悠久の昔から、口々に伝承されて来た口承文芸は、文字の使用以前から民衆の手によって生成されて来たものが、漢字によって、或いはハ

ングルによって定着したものであり、これらを一括して口碑文学と言う。

私は、韓国文学史を口碑文学と記録文学の二つの側面に留意して、今日まで大学で講義して来た。本書『韓国古典文学入門』は、非専攻者のために書いた一種の教養書であり、ハングル文学を中心に扱ったが、口碑文学と漢字文学に対しても若干言及しておいた。

本書はそもそも、日本の読書人を念頭に置いて書いたものではない。この度日本語に翻訳されるというので思い出したが、韓国の文学は、神話時代から歴代王朝を経由する間に日本と多くの交流をもった。この訳書の反応を自らの鏡として、将来、韓・日関係に留意した文学史も計画してみるつもりである。

『韓国古典文学入門』が日本語に翻訳されて、日本の教養人にも読むことのできる機会が設けられたことに對し、著者として多幸なことに信ずる。

この拙著を翻訳して下さった、天理大学の姜漢永教授と油谷幸利講師の労苦に深謝し、また、快く刊行して下さいました国書刊行会の佐藤今朝夫社長に感謝を捧げる。

本書が韓・日文化交流に、ひいては両国古典文学の理解に對する一助とならんことを切に願う。

一九八二年三月二十日

著者識

まえがき

古典は万人の古典であらねばならない。古典研究家或いは古典蒐集家の書齋や倉庫に秘蔵されていたのでは、古典はその輝きを示すことができない。古典文学もこの方面の専門家のみが、読んだり鑑賞したりできるのであってはならない。万人が読み、かつ鑑賞してこそ、古典文学が真価を発揮するのである。

私は二十有余年の間、大学の教壇で韓国の古典文学を講義してきた。またこの方面の著書も数巻出版したことがある。この講義は、古典文学を専攻している大学生のためのものであることは勿論であり、私のこれまでに出した著書の読者も、大概はこの方面の専攻者に限られている。のみならず、今まで刊行されたこの方面の著書は、全て（古典文学）専攻者のためのものであった。（韓）国文学史や（韓）国文学概論のような概説書もそうであり、時調・歌辞・小説等の分野別の著書もやはりそうであった。このように古典が大衆とかけはなれているということは、古典自体のためにも不幸であるが、古典専攻者達の損失も大きいと言わざるを得ない。万人の古典がその使命を尽くし得ないからである。

まえがき

私は平素から古典文学の大衆化に意を用いており、機会ある度毎に新聞・雑誌に投稿してきた。これは勿論、専門的な論文ではない。教養のための作品の批評であり、興味を中心とした作家の解説であった。ところが意外にも反応は良かったように思う。特に大韓日報に連載した時には読者から質問の手紙が来たり、スクラップをするために抜けた部分を請求して来ることもあった。何よりも私の心を満足させたのは、農漁村の読者達から来た手紙であった。教

養のために回し読みをしたり、互いに討論をしたりもするというのである。私は大きなやり甲斐を感じた。我々の古典が農漁村にまで読まれるようになったという事実は、全国民の教養水準が高まりつつあるという事実を説明してくれているからである。

この「韓国古典文学入門」は、古典の大衆化のために編んだ本である。十冊の専門書よりも、この一冊が占めている読者層の方が遙かに多いことであろう。書物というものは多くの人々に読まれねばならない。読まれない書物は書物ではなくて、ただの「紙のかたまり」に過ぎない。

幸いにも、畏友金聖哉社長も私と意を同じくして、この本の出版を引き受けてくれたのみならず、図版まで入れて一般読書人のために犠牲的な協力を惜しまなかった。我々の古典文学関係の著書で図版を入れたものは、これが最初であるという点においてもその意義は大きい。これによって読む人達に退屈感を与えずに済み、また古典の世界に一層近づけることができる道にもなるのである。これと並行して、内容も専門的な学説の紹介や私の主張のようなものは避け、なるべく作家・作品の解説に重点を置くように努めた。

本書に収録された文の中には、既に発表したものも少なくないが、この機会に新たに書いたものも多い。それは私なりに文学史の体系を建てるためであった。

終わりに、編集の労をお取り下さった一志社編集部の皆様に感謝の意を表すると共に、原稿の整理、校正を全て担当してくれた朱明姫嬢の労苦をここに銘記する。

一九七三年四月二十五日

目次

日本語版への序文

まえがき

一、神話の中の詩歌

一、帝王の哀歌〈黄鳥歌〉……………四

二、君主待望の群舞〈亀旨歌〉……………六

三、酒神と楽神の終焉〈箏篋引〉……………一〇

二、三国時代の説話文学

一、夢の文学〈調信夢〉……………一五

二、太陽神の日本移動〈延鳥郎・細鳥女〉……………一八

三、『沈清伝』の母胎説話二篇〈貧女養母〉・〈居随知〉……………二〇

四、符契交換の古代風習〈嘉実と薛氏女〉……………二三

五、最初の浪漫的作品〈新羅殊異伝〉……………二五

附、崔致遠と雙女墳……………二八

六、烈女と淫蕩王〈都弥の妻と蓋婁王〉……………三三

七、最古の諺〈郁面説話〉……………三五

八、最初の謎々〈善徳女王の知恵〉……………三七

三、新羅の精華 郷歌文学

一、公主の出宮〈著童謡〉……………四一

二、郷歌の魔力〈彗星歌〉・〈怨歌〉・〈兜率歌(散花歌)〉……………四三

三、花郎の讃歌〈讃耆婆郎歌〉・〈慕竹旨郎歌〉……………四八

四、浪漫説話に織り込まれた郷歌〈献花歌〉・〈願往生歌〉……………五〇

五、踊りと歌の饗宴〈処容歌〉……………五四

六、均如と彼の郷歌……………五六

七、郷歌総覧(現存二十五旨、年代順)……………五九

八、郷歌の意訳……………六一

四、高麗の歌壇

一、庶民たちの歌……………六九

二、貴族たちの歌……………八五

三、失なわれた歌……………九六

五、高麗の叙事文学

一、李奎報と英雄叙事詩〈東明王〉……………一〇五

二、一然と〈三国遺事〉	一二八
三、擬人化小説の全盛	一四三

六、訓民正音創製と竜飛御天歌

一、訓民正音の頒布（序に代えて）	一四七
二、唯一の叙事詩〈竜飛御天歌〉	一四九
三、仏教文学の開花〈月印釈譜〉	一五三

七、李朝の小説文学

一、金時習と余鰲新話	一五五
二、許筠と「洪吉童伝」	一六九
三、西浦 金万重	一七六
四、近代精神の先駆者：燕巖 朴趾源	一八二
五、作中人物を通してみた「春香伝」	一九四
六、「雲英伝」と「芝峰伝」	二〇二
七、「鄭寿貞伝」と「鄭寿景伝」	二〇七
八、宮中を舞台としたノンフィクション〈宮廷小説〉	二一一
九、パンソリの巨匠〈申在孝〉	二一七
十、古代小説に現われた女性の位置	二二二

二、古代小説の女判官たち……………	二三〇
三、古代小説の悪女たち……………	二三五
八、李朝の詩歌文学	

一、成宗の事業とその事調……………	二四五
二、長寿の時調詩人 宗純……………	二四七
三、林白湖の時調……………	二四九
四、詩歌の大家 鄭澈……………	二五二
五、妓流たちの時調——笑春風・雪中梅・洪娘・松伊 その他——……………	二五九
六、辞説時調……………	二六四
七、詩歌集「樂章歌詞」……………	二六七
八、流刑と歌辞文学……………	二六九
九、時調の現代的批判……………	二八六
十、日本紀行へ日東壯遊歌……………	二九三

九、女流遺香

一、奇抜な詩想の所有者 黄真伊……………	二三三
二、芸術と婦徳を兼備した女性 申師任堂……………	二三六
三、閨怨の詩人 蘭雪軒許楚姬……………	二三一

四、志操高き扶安妓女 李梅窓	三三六
五、賢母の象徴 西浦の慈堂伊夫人	三四〇
六、側室文学の白眉 李玉峰	三四四
七、悲劇の皇太子妃 惠慶宮洪氏	三四八
八、風流を知る女流作家 意幽堂金氏	三五一
九、針仕事の詩人 竹西	三五五
十、政客と交遊した詩妓 雲楚	三五九
十一、才と徳を兼ね備えた静一堂姜女史	三六二
十二、青孀の閨怨を作品化した 貞一軒南女史	三六五
十三、宮中秘話を素材とした「癸丑日記」の無名女官	三六九
十四、無名女流作家の擬人体随筆「祭針文」と「閨中七友争功記」	三七二

十、口碑伝承の文学

一、伝来童話の世界	三七七
二、伝来童謡の構造	三八五
三、説話に現われた鬼（トッケビ）	三九七
四、民譚の中の月	四〇七
五、民謡と説話の中の哀歎	四一五

韓國古典文學入門

一、神話の中の詩歌

本格的な詩歌と見なされる郷歌が成立する以前の詩歌として、現在残っているものは、僅かに漢文で表記された三篇を数えるにすぎない。「黄鳥歌」「亀旨歌（「迎神君歌」とも言われる）」、そして「筵篋引（「公無渡河歌」とも言われる）」である。これらの歌は全て、神話の中にちりばめられて存在している。原始的で素朴な歌自体よりも、これらの歌を装飾している「物語」が一層劇的であり、文学的である。物語を切り離して見れば、これらの歌は全て味けなく、堅苦しいだけである。「神話と詩歌の並存」というよりも「神話の中に棲息している歌」という方がより妥当であるほどだ。

実際のところ、新羅の郷歌もほとんどが興味深い「物語」を伴っている。しかし、この古代歌謡は、神話なくしては理解できないほど「物語」に依存している。古代は、それほど叙事性の強い時代であったことが理解できる。したがって、郷歌もこの叙事性から完全に脱け出し得ない詩歌であると言うこともできる。それはさておき、古代の歌謡は詩歌としての純粋な文学的価値をとりたてて持つてはいないのだが、郷歌以前の長い空白期に位置しているという点からも、また、建国神話を初めとする上古の説話を理解するという点においても、一考してみなければならぬ貴重な資料であると思われる。そうした意味で文学史の序章として本書巻頭に配したのである。

一 帝王の哀歌 〈黃鳥歌〉 うぐいすのうた

高句麗の二代目の王は瑠璃王である。高句麗の開国英雄である東明聖王の嫡子がまさしく彼である。この瑠璃王が創った歌が今日まで残っており、国文学史上光彩を放っている。西暦紀元前十七年の作品であるから、実に二千年近い歴史をもっている。この歌は、詳細な創作の動機と共に『三国史記』高句麗本紀に漢訳されて伝わっている。

軽やかに飛ぶ うぐいす

妹と背と 飛び交い

寄辺なき我が身をば思う

ああ！ 我は誰と共に往かん

翩翩黃鳥 雌雄相依

念我之独 誰其与婦

一国の帝王の作品としては、あまりにも感傷的である。雌雄のつがいとなって飛んでいる鶯をみて、自らの孤独を歎息しているからである。しかし、この歌を作るに至った動機を知れば、その心情を理解することができる。

瑠璃王は、その妃である松氏を早く喪くした。王はすぐに二人の女性を後添えとして娶った。一人は禾姫いねひめといって高句麗の女人であり、もう一人は雉姫きじひめといって中国の女人であった。一人の男が二人の女性を、それも国籍を異にする女性を妻として迎えたのであるから、自然、嫉妬の炎も激しくならざるを得なかった。あまりに争いが絶えないので、王も止むなく東と西に妃の宮殿を新たに建てて、離れて暮らすようにさせた。そして、王は箕山へ獵に出かけて

永い間王宮を留守にしておいた。この間に二人の王妃はまた争いをした。禾姫は雉姫に対して「お前は賤しい漢人の婢でありながら、どうしてこんなに生意気で無礼なのか？」と露骨に侮辱した。痛い所を突かれた雉姫は恥ずかしさとかやしさとで、すぐさま宮殿を出て行ってしまった。この知らせを聞いた王は直ちに馬を駆って雉姫の後を追ひ、もう一度戻るように勧めたが、怒った雉姫はあくまでも戻ろうとはしなかった。そこで王は木の下で休みながら行き交う鶯を見て、この歌を作ったというのが『三国史記』に伝わっている内容である。

ところで、この作品に対してはいくつかの異説がある。第一は、この歌に出てくる瑠璃王の相手は、雉姫ではなくて先の王妃である松氏だというものである。これは、瑠璃王のような英雄が、後添である中国の女性にあれほど恋々としている筈がないという常識的な解釈の外に、『三国史記』の記録を詳細に吟味してみれば、そのような可能性もあるというのである。『三国史記』によると、瑠璃王が「馬に咎打ちてこれを追うも、雉姫怒りて還らず（策馬追之雉姫怒不還）」という記事に続いて、「王嘗て樹下に休み、黄鳥の飛集するを見てすなわち感じて歌いて曰く（王嘗息樹下 見黄鳥飛集乃感而歌曰）」とあるが、この条の「嘗て」というのは、雉姫の出奔（雉姫亡帰）以前を指しているものと解釈するのである。つまり、この歌は先の妃である松氏が逝去した時の孤独感を歌ったものであるという見解である。

もうひとつの学説は、この「黄鳥歌」は実は瑠璃王とは関係のない古代の歌謡であり、それが後に高句麗の瑠璃王の物語の中に挿入されたとする見解である。その理論的根拠は、恋愛感情を詠い上げた古代歌謡（たとえば中国の詩経のようなもの）の製作過程を、季節的な祭礼儀式として説明し得るという点に置かれている。即ち、詩経の歌謡は祭礼儀式における踊りや歌の競争から即興的に歌われたと推定される。我が国の古代社会にあっても、春と秋に祭礼儀式が挙行され、その時には男女が群をなして歌いかつ踊った（男女群聚歌舞「魏志東夷伝」）というが、この時に